

【優秀賞】

「ニエットからズドラーストビチェへ」

北海道教育大学附属札幌中学校

2年 二階堂 桜子

イボン、ソルダート、ニエット。これは私が祖母から聞いたロシア語です。

祖母は、国後島の元島民です。一九四五年八月の終わり、古釜布の湾にロシア兵が上陸しました。そして九月に多くの島民と一緒に、祖母は家を離れなくてはならなくなりました。

その約一月の間、ロシア兵は島を巡回し、日本兵が隠れていないか探して歩いたそうです。生きるために、八歳の祖母が覚えたロシア語が、イボン（日本）、ソルダート（兵士）、ニエット（NO、いいえ）でした。ロシア兵から何か聞かれることがあっても、ニエットと答えるよう両親から教えられたそうです。

実際にロシア兵と話す機会はなかったそうですが、70年以上経っても祖母は忘れることはありませんでした。

島を追われた祖母はその後、北海道内の親戚の家に身を寄せることになります。そこでは、島での豊かな暮らしが一変し、兄弟も離ればなれになり、悔しい思いをたくさんしたと教えてくれました。島に帰りたいという願いが叶うことはなくても、前を見つめて黙々と生きてきたのだと思います。

私は以前、外の元島民の方の講話を聞いたことがあります。択捉島出身の方のお話によると、島は自然が豊かで、ラッコやエトピリカのような珍しい動物がいたり、子供たちがたくさんいて賑わっていたということでした。その男性も、七歳で突然島を追われました。

「島を返せ！」大きな声でその方が叫ぶ声を聞きました。生の声を聞いて、私は胸が揺さぶられました。島を返せと叫んでいるのは、目の前にいる高齢者の方ではあるけれど、本当は七歳の子供の心の叫びなのだと思いきました。祖母のようにずっと辛抱して生きてきて、大人になってやっと大きな声で叫ぶことができるようになったのではないかと思うのです。

元島民の方のお話を他の人にも聞いてもらいたいと思います。そうすれば、決して北方領土を力づくで解決することはできないとわかるはずですが、無理やり島を追われる人を再び作ってはいけません。

北方領土問題は七十四年経っても解決に至っていません。ビザなし交流や共同経済活動をしてきても、日口間にはまだ平和条約が締結されていないのです。両国の利益になるような条約を結び、早く国境線が引かれることを望みます。

祖母から聞いたロシア語は他にもあります。ズドラーストビチェ（こんにちは）、ダスビダーニャ（さようなら）です。この言葉を覚えて祖母や元島民の人々は、ロシア兵と交渉し平和的に解決しようとしたのでしょうか。祖母が生きるために覚えた言葉を、今度は私が使ってみようと思います。ロシアの方との交流のために。叶うのであれば、日本に戻ってきた国後島の地で。